
二次元。

きのりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二次元。

【Nコード】

N6339J

【作者名】

きのりん

【あらすじ】

間宮奈々香は、二次元大好きのいわゆるオタクだった。しかし、そのせいで同じクラスの人からいじめを受ける。ナナカが辛くて苦しい時、「助けて」と叫んだ。すると後ろから「大丈夫」との声がかたー、本田菊とアーサー・カーランドがたっていた。

第1話 悲しみの中

ヘタリアのキャラが出てきます。
オリジナルキャラ＋ヘタリアキャラのコラボ的な物です

私は今。

絶望のというなの憎悪の中に居た。

私は間宮 奈々香。^{マミヤ ナナカ}

現在中学1年。

クラスは1年10組。

この学校は11クラスもある、マンモス校だ。

「オタクはキモイ」

「近寄るな」

「二次元が好きなんて病んでるよね」

もういいよ。

聞き飽きた。

そう。

私は二次元という架空の世界のキャラクターたちのマンガやアニメが
すごく好きだった。
いわゆる「オタク」だった。

二次元が好きなんて、人の勝手でしょ？
マンガやアニメをいっぱい持っているなんて、人の勝手でしょ？
三次元は腐ってるって思うのも、人の勝手でしょ？

なぜだめなの。

私の世界を否定するの。

二次元を否定するの

朝、また憂鬱な学校に行く。

どうせなら家に引きこもってマンガを読んだり絵を描いているほうが断然いい。

三次元の人ほぼみんな腐っている。

二次元にいけたらいいのにな。なんで行けないんだろうな。

登校中はいつも、

「二次元にいきたいな」と思っている。

今、目の前に二次元への扉が出ればいいのに。

そんなことばかり考えて、歩いていた。

もちろん。同じ学校にオタクの子は何人も居る。

もちろん、お友達。

でも、この1年10組はだれもいない。

今は芸能人がいいだのなんだの。

最初っから話は合わなかった。

それは私が芸能人という3次元の人間に興味が無かったから。

でも他のクラスは違う。

クラスに2・3人は必ずオタクが居た。

そして、オタクを認めてくれる人も居た。

なのになぜ？

クラスの運が無かったのか。

神様がいじわるをしているのか。

わからない。

そういううちに、私はオタクの友達以外に、

笑顔を見せることは一度も無かった。

おこることも泣くことも無い。

ただ無の表情をずっと、ずっと。

誰かにたまたま話しかけられても、

無の表情のまま返事を返す。イントネーションは棒読み。

なんでこんなことしてるかって？

そりゃあ、

いじめとか悪口とか、馬鹿なことしか考えてない三次元の人に、
表情を見せる必要がないから

腐った人々に、笑顔なんて見せる必要がある？

いつの間にか冬休みを終え、

もう2月になろうとしていたとき。

クラスの人みんな私の悪口をはじめ、

男子は私に消しゴムを投げる。

女子は影でキモイキモイと何度も言っている。

馬鹿げたことを始めたのだ。

これがいわゆるいじめってやつ？

もうどうでも良かった。

しかし、いじめは悪い方に進む一方。

机に「死ね、オタク」

黒板に「オタクはキモイ」

上履きに「死ね」

そんなに二次元を好きで居るのがいけないの？
夢見ちゃいけないの？

でも強がっていた。

いじめがエスカレートしていくたびに、
夜は怖くて震えていた。

ある日の夜。

私は自分の部屋でパソコンに向かっていた。

気がつくとすぐ「いじめ相談掲示板」とか「いじめに負けるな！」
とか書いてあるHPに行ってしまう。
ため息をつく。

「なんで私なんだろう……」

涙でつぶされそうになる。

クルシイ。カナシイ。ツライ。
心で連呼する。

「誰か……助けてよ……」

『大丈夫』

後ろから声がした。

すぐに私は振り返る。

そこには幽霊のような人が二人たっていた。

「だっ．．．．．だれ!？」

驚いた様子で私は言う。

「あ、脅かしてしまつてすいません。

私は、日本の本田菊ほんだ きくともうします。」

「お．．．俺は、アーサー・カークランド、イギリスだ。」

「本田．．．菊．．．!？　アーサー．．．．!？」

「おや、その様子だと私たちのこと知っているようですね。」

当たり前だ。

私が好きなマンガ第一位のマンガのキャラが今目の前に居る。

「え．．．!？　なんで．．．!？」

「そりゃあ、お前が心配．．．いや、お前のためにわざわざ来てやつたんだぞ」

本田菊。

通称「日本」。2000歳を超えたおじいちゃん。

アーサー・カークランド。

通称「イギリス」。見た目年齢23歳。

私の好きなキャラクター。

なんで今ココに・・・・・・・・

『お前を助けにきたんだ』

第2話 出会い

「え．．．？助けに．．．来た．．．．」

「そうです。」

ヘタリアの世界から許しをいただき、
この三次元の世界に来ました。」

と菊は微笑みながら言う。

二人はくつきりと私の目にうつっていた。

身長もすっかりわかる。

私の身長は160。

菊の身長は165。

アーサーの身長は175。

もちろん好きなキャラだから、はつきりと記憶していた。

「とは言っても、俺らはお前のそばに居るだけだからな。」

アーサーが照れくさそうに言う。

でもまだ私は信じられなかった。

そりゃあ二次元のキャラが突然、

三次元に来ましたー！なんて言っても信じられるわけ無いだろう。

とりあえず私は、自分のほっぺをつねってみた。

「イテっ．．．．」

現実だ。夢では無い事を確信した。

私はしどろもどろ、

「えー．．．っと．．．

なんで私を助けにきたんですか．．．．？」
と言った。

「それは、あなたが助けてと言ったからです。」
菊が言う。

助けて

その一言で二人が来てくれたなんて．．．
いや、他にも理由はあるはず．．．．
「え、でも理由はそれだけじゃないですよね??」

「それは、お前が自分で考えるんだな。」
アーサーはそっぽを向きながら言う。

とりあえず菊は、私にこういった。

「私たちの姿は、あなた以外見えません。
声も、あなたにしか聞こえません。

ご飯は．．．とりあえず必要ありません。

私のことは菊と、イギリスさんのことはアーサーとでも読んでください。」

「え．．．菊とアーサーでいいの?」

「はい^^」

それから、私たち三人の生活は始まった

次の日の朝、今日もまた憂鬱な学校．．．．
でも、今日からは違った。
菊とアーサーが居る。

登校するときは、左に菊。右にアーサーが居た。
三人でしゃべりながら歩く。

一人じゃない。

学校についても、他のクラスのことオタ話をする。
授業のときは、横で菊が勉強を教えてくれる。
逆にアーサーは、勉強を聴いてくる。
休み時間は、菊とアーサーは校内見学と言ってどこかに行ってしまう。
う。

なので私は他のクラスの子とオタ話。

その昼休み、
菊とアーサーは密かに話し合いをしていた。

「今日、ナナカさん教室で一度も笑ってないですよね。」
「そうだなあ．．．こりや結構大変だぞ。」

「なんとかして笑わしてあげないとですね」――

「でもよ、俺たちは何にも出来ねえ。
ただあいつが笑うのを待つしかねえんだ」――

「
そうですね
」

第3話 真実

私はいつもの様にパソコンに向かい、他のクラスの友達とメールをしていた。

「おい！おまえ他のことしないのかよ」

アーサーがつまらなそうにいう。

「他のことって・・・例えば？」

私がいうと、アーサーは口をまごまごしている。

「別にいいんだよ。この時間が生き甲斐だから。私という。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

菊はぼーっと天井を見ていた。

「・・・・・・・・どう・・・・・・・・すれば・・・・・・・・」

菊は誰にも聞こえないような声で呟く

「ん？何かいった？菊。」

私が聴くと、菊は焦った様に

「いえ！なんでもありません」

と言い、また一人でぼーっと天井を見つめていた。

次の日。

1時間目からナナカは大嫌いな体育だった。

しかもバスケットボール。

なぜ嫌いかって？

それは一緒にやりたくもないのにやらされるから。

私は大嫌いで、得意だったので結構みんなから話しかけられてい

た。

でも今日は違った。

私のクラスで一番苦手、まあ全員苦手だけだね。

その人と同じチームになり、やる気がまったく出なかった。

しかもその同じチームになった子はバスケット部。

上から目線の様に文句を言う。

「そこでドリブルしてゴールいれなよ？入るでしょ？」

．．．黙って私は指示に従った。

でもその子は私は絶対にゴールに入らないような目でみる。

しょうがないからため息をつきながらボールを投げた。

私は球技は得意だったのでさくつと入った。

その子はフンツといい何処かへいく。

ああだから三次元はクズが多いんだ。

私の頭の中はその言葉がずっと居た。

その日はおとなしく。いや、むしろ誰も寄せ付けないようなオーラを放った。

アーサーは

「そんな怖い顔するなよ．．．みんなよってこないだろ？」

「みんなよらなくて良い。三次元は糞だから。見たくもない声も聴きたくない。」

私は即答だった。

菊はやっぱり今日もぼーっとしていた。

片付けの時、私は一人でボールの片付けをしていた。
すると、体育の先生が私の方によってきた。

私は「雑用かな．．．」と思っていた。すると先生は、私が予想も
つかないことを言ってきた。

「間宮」

「はい。なんでしょうか先生」

「．．．．．最近どうしたの？」

「え．．．．．？」

「なんか前みたいない元気な間宮じゃないな、と思って。」

「えっ」

「今日のチームなんかやだった？」

「いえ、別に大丈夫です．．．けど．．．」

嘘。大嫌いな人

「なんか嫌なことあった？」

「な．．．ないです。」

嘘。嫌なことなんてありすぎる。

「そうか、じゃあ大丈夫だね^^」

そういつて先生は何処かへ行ってしまった。

見透かされているのか

？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

菊はまっすぐ私を見つめていた。

今先生に言っていたら、ちよつとは変わったのかな？

今先生に言っていたら、みんなと仲良くなれたのかな？

今先生に言っていたら、前に進めたのかな？

私は頭の中でそんな言葉がぐるぐる廻る。

「・・・・・・・・・・まだ、お子様ですね

」

菊が誰にも聞こえない様に、ぼそつと言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6339j/>

二次元。

2010年10月10日14時29分発行